

トピックス 北地域野外太極拳 280名参加で盛大に開催！

第20回の北地域野外太極拳は、4月1日（日）午後1時半から、桜が満開の柴又公園で、約280名が参加して開催されました。東大島鶴の会からは10名が参加、10時に柴又駅に集合して、柴又帝釈天に参詣、寅さん記念館で遊び、土手の桜の下でお弁当を食べ、太極拳の終了後は参道で、思い思いにお買いものをするという、終日のお楽しみとなりました。

【右写真；全員での演舞 撮影；北師範】



閑人閑話 その1 『終わった人』に衝撃！

3月末の新聞にすごい広告が出ていました。“夢なし、趣味なし、仕事なし、そして、我が家に居場所なし”という（男性の）定年退職者の悲哀をズバリ表現した見事なキャッチフレーズです。これは、内館牧子さんの小説『終わった人』の文庫版発刊の広告、また6月9日から上映される同名の映画の広告でもあったのです。ということで、さっそくその本を買って読みましたが、たいへん面白く、また衝撃的でしたので、ご紹介する次第です。

主人公の田代壮介は東京大学法学部卒、国内最大のメガ銀行に入社、順調に出世街道を進むが、最後にライバルに抜かれて役員になれずに、子会社の専務として63歳で定年を迎える、まさにその時の心境、状況が、上のキャッチフレーズの名文句なのです。こういう人よく見かけますが、“家にも居場所がない”初老の男性の悲哀をよく捕えていると思います。内容は省略しますが、小説のその後の進行、結末、奥さんとの関係の激変などもたいへん刺激的、かつ示唆に富んでおり、共感しながら読み終えることが出来ました。まあ、個人的には、こういう「定年後」を送らないでよかったと、自分自身にほっとしているところです。

その2 急病でご迷惑をお掛けしました！

4月18日朝からなんとなく胃の調子がわるく、19日夜の中野教室も途中で失礼させてもらって帰途に就いたのですが、まあ軽くうどんぐらいならと店に入り、まずは米からできた流動物を若干量摂取し、注文したうどんに箸をつけたのですが、半分で食べられなくなってしまいました。家に帰ると胃が膨満した感じで、間もなくしゃっくりが出始めて一晩中止まらず、おまけに胃の中のものを全部吐き、さらには、たぶん胆汁と思われる苦い液体が次々に咽喉に上がってきて、朝になると声がしゃがれてうまく言葉が出ない状況でした。20日の東大島鶴の会の代講を電話で告げるのが精いっぱいでした。（幸い同会は師範代を置いていますので、こんな時安心ではあるのです。）

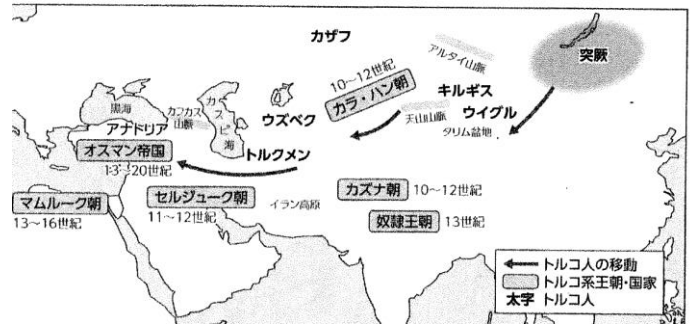
診療所で急性胃炎の薬を調合してもらい、またしゃっくりに著効がある漢方薬の「柿蒂湯（シテイトウ）・柿のへたが主原料」または錠剤の「柿蒂錠」を教えられ（つまり保険指定外なのです）、それを買ってきてもらって飲んだところ、2日目にようやく止まりました。2日ほど絶食し、ようやく回復してきましたが、21日の早朝太極拳、22日の清新鶴の会も欠席、同日夜の下町会の講義も先延ばしをお願いするなど、たいへんご迷惑をおかけしました。謹んでお詫び申し上げます。

第6章 オスマン帝国（オスマントルコ）の成立まで

中国の北辺にいて、狄、北狄と呼ばれていた北方系モンゴリアの遊牧民族がありました。ある時代には匈奴とも呼ばれていましたが、546年には突厥（チュルク・鉄勒）として建国しました。北はバイカル湖、西はカスピ海にいたる大帝國となり、当時の隋と対抗します。（ちなみに現在のトルコ共和国はこの546年をもってトルコ建国の年と定めています。）しかし、早くも583年には東西に分裂します。西突厥が、その後さらに西へ西へと移動しながら、次々に建国してゆきます。中央アジアの交易路であるシルクロードを支配することにより、また鉄の加工に巧みな集団でもあることもあり、のちにはイスラム教を受け入れることで、西方のイスラム諸王朝とも広く交易するようになり、大きな力を蓄えてゆくわけですが。欧州のフィンランド、ハンガリー、ブルガリア、さらにはロシア領にいたコサックも、みなこのチュルク（＝トルコ）系の民族に由来するそうです。

ともあれ、11～12世紀にかけては、イラン、イラクをも版図とするセルジューク王朝を建国します。当時東ローマ帝国の版図であったアナトリア半島に侵攻して、東ローマ帝国軍と激突、東ローマ皇帝を捕虜としたことが、のちの十字軍による中東侵攻のきっかけとなったことは有名です。その後モンゴル帝国による中東支配などの複雑な経緯を経て、この王朝が内部で分裂弱体化した時に、同じトルコ系のオスマン家のオスマン・ベイ（オスマン1世）が、現在のトルコ共和国の版図であるアナトリア半島西北部のごく一部を領土として、1299年に建国したのが、「オスマン帝国」です。

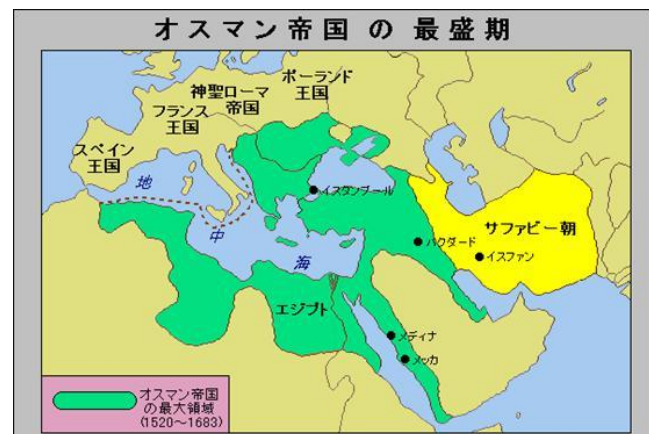
図13-3 トルコ人の移動ルート



第7章 オスマン帝国の拡大そして弱体化

それから、周辺の諸国との果てしない領土獲得戦争を数世紀にわたって繰り返しながら、次第に版図を広げてゆきます。

1453年には東ローマ帝国ビザンツ王朝の首都であり、ヨーロッパとアジアとの結ぶ要路でもあるコンスタンチノーブル（こののちイスタンブールと改称）を、戦史に残る“艦隊山



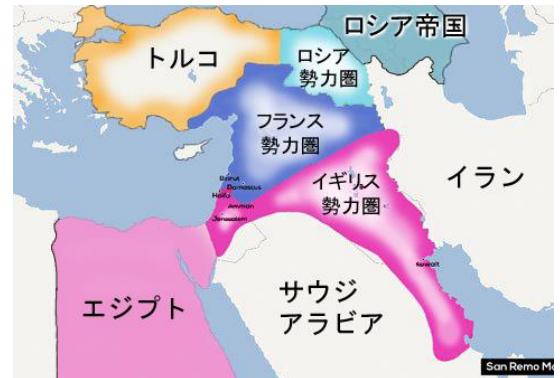
越え作戦”【上画像】で陥落させ、ついには東ローマ帝国を滅亡に導きます。これを契機として、ヨーロッパ側のバルカン半島をはじめ、旧来のいわゆる東欧諸国までもを支配するようになりました。また、イランを除く中東全域、さらにはエジプトはじめ北アフリカ諸国まで版図に組み込む大帝国【左画像・17世紀】となりました。こうして成立した“多民族多宗教大帝国”も、やがて内部統制の困難さの増大と

ともに、産業革命後のヨーロッパの経済力、軍事力の増強によって、力関係が逆転するようになっていきます。

第8章 第1時世界大戦での敗北と解体

17世紀末から18世紀半にかけてギリシャ、東欧圏の諸国、そしてエジプトなどが次々と離脱してゆきました。オスマントルコ帝国の財政は悪化、ついには、欧州諸国が財政を管理して内政に干渉するようにもなりました。

こうしているうちに、欧州各国間の緊張が強まり、ついに、第1次世界大戦がはじまりました。ロシアと対立関係にあったオスマントルコ帝国はドイツと同盟を結び、ロシア、フランス、イギリスなどとの連合軍と戦いますが、戦線は複雑化し、また拡大していきます。戦争は1914年から1918年まで続きますが、結局ドイツ側が敗れ、オスマントルコ帝国も崩壊します。イギリス・ロシア・フランス3国の間で1916年に秘密裡に結ばれたサイクス・ピコ協定によって、旧領土はそこに住む住民の意志、意向とは全く関係なしに、それぞれの植民地として分割【上の地図; 1920年】されま



すが、青年将校ケマル・アタチュルクの必死のクーデターで、かろうじてアナトリア半島でトルコ国として生き延びることができました。イギリスはこのほか、アラブの将来の独立を保障したフサイン＝マクマホン協定(1915年)、ユダヤ人のパレスチナでの居住を約束したバルフォア宣言(1917年)、と相矛盾する約束をアラブ側とユダヤ側の双方に約束していることもあり、これもまた中東問題を複雑にした原因となっています。イギリスはエジプトのスエズ運河の権益をフランスから奪還しますが、この時、ユダヤの豪商ロスチャイルド家から多額の資金的援助を仰ぎ、次いで第1次世界大戦の戦費の調達で、再びロスチャイルド家の援助を受けていますが、このときにロスチャイルド家の要請で、ユダヤ民族のパレスチナ帰還を約束したのがバルフォア宣言です。のちのちこれらのイギリスの外交は、「三枚舌外交」として国際的に非難されることとなります。

また、この少し前から中東地域の石油資源が注目されるようになり、先進諸国による石油資源争奪戦の場に、あらためて中東全体が巻き込まれてゆくわけです。

第9章 第2次世界大戦後の中東の支配地図

第1次世界大戦の終結からわずか20年ほどで、再び起こった第二次世界大戦は、1939年から1945年までの6年間、ドイツ、日本、イタリアの日独伊三国同盟を中心とする枢軸国陣営と、イギリス、ソ連、アメリカ、中華民国などの連合軍陣営との間で戦われた全世界的規模の巨大戦争です。1939年9月のドイツ軍によるポーランド侵攻と、続くソ連軍による侵攻、そして英仏からドイツへの宣戦布告はいずれもヨーロッパを戦場としました。その後1941年12月の日本と米英との開戦によって、戦火は文字通り全世界に拡大し、人類史上最大の戦争となりました。



戦争はご承知の通り、独伊日連合の敗北で終結しましたが、これをきっかけとして従来の欧米諸国による植民地主義に対する抵抗運動が一段と激化して、全世界で、次々と独立してゆくという良

い副産物もありましたが、中東地域については基本的にはサイクス・ピコ協定によって人為的に作られた（ですから、前頁の地図でご覧のように国境線が直線になったりしています。）国家を旧宗主国が間接的に支配する、あるいは権益を保持する、という構図に変わりはなく、そこへ、さらに、アメリカ、ソ連（ロシア）、中国が割って入るということで、問題はさらに複雑化しています。いずれにしても石油資源を巡っての譲ることの出来ない争いです。

第10章 答えのない結論

これらに加えて次のような危機的対立が存在します。

- ① クルド民族問題；イラン、イラク、トルコ、シリア、ロシア領などにまたがって住む 3000 万人とも言われるイスラム教の大民族集団ですが、かねてから独立国家となることを訴えています、それぞれの国の思惑もあり、実現する見通しはなく、運動が過激化しているのが現状です。アメリカはシリア政権を倒すためにクルド軍を利用し、トルコはシリア領内のクルド軍を攻撃する、ロシアはシリア政権を支援してすべての反体制派を爆撃している、という複雑怪奇な局面となっています。
- ② ご存じのイスラエルとパレスチナの正解が見えない争いです。「核」を持つイスラエルとイランとの対立もたいへん危険な火種です。
- ③ アメリカに依存する石油大国サウジアラビア（スンニ派）とロシアと密接なイラン（シーア派）に代表されるイスラム教の宗派对立。
- ④ イスラム国の『中東から欧米は手を引け、中東にアラブ人のイスラム国家を作るのだ』という主張はまさにその通りの正論だけに、これまた諸大国の思惑とは真っ向からぶつかるものです。現在、敗勢にあるとはいえ、その主張は全中東地域でくすぶり続けるでしょう。
- ⑤ そもそもキリスト教国家とイスラム教国家の歴史的な敵対関係の連鎖です。イスラム側から見れば十字軍の侵略や近代からの植民地支配と資源収奪を言いますが、キリスト教国家側には、過去 4 度にわたるフン族や、モンゴルや、オスマントルコによる侵攻と破壊、虐殺と凌辱の恐怖の記憶があります。
- ⑥ 中国は今「一帯一路」を詠って欧州への新しいシルクロードの構築を狙っていますが、いずれ途中のイスラム諸国との対応に迫られます。自国内のイスラム教ウイグル族弾圧との整合性を求められるのは必至です。またロシアの南下政策とも衝突しかねません。

とすることで、中東問題の私の勉強の過程を、4 回にわたり長々ご紹介しました。正直なところ、何が誰が正しいのか、どのように解決されるのか、そして、シリアだけでも千二百万人とも言われる中東の難民・避難民の将来はどうなるのか、神様であっても答えることのできない難問ではないか、と言うのが、私のたどり着いた結論です。【終わり】

旅をうたい拳を詠む 桜をうたう

待乳山に静かに祈る人ありて花見の喧噪ここへは届かず
びっしりと咲き満つ花のエネルギー

その重たきにしばしたじろぐ

盃に散り入る花びら唇（くち）に受け一期一会の花見今年も

